

[外国語]

明示的なリスニングストラテジー指導で、 生徒の聴解力は高まるのか？

野口 裕太*

1 先行研究の概観

英語初学者である中学生にとって、効果的なリスニングスキルの習得は円滑な英語学習を進めていくうえで不可欠である。しかし、現状では、リスニング練習は、授業での限られた時間にしか行われず、系統立ててリスニングの方略を指導しているとは言い難い。他方、様々な文献では、リスニングスキルを向上させるために明示的なリスニングストラテジーの指導の重要性を強調している。

多くの教師は、生徒は手助けなしで徐々にリスニングスキルを発達させると考えている。しかし、多くの研究者は、リスニングスキルに特化した指導が生徒のリスニングスキルを発達させるためには必要であると考えている。Vandergrift (2004) はリスニングストラテジートレーニングを提唱し、外国語を学ぶ際のその有効性を主張している。

言語学習や言語使用のストラテジーに関する研究によると、ストラテジー指導は効果的なストラテジー使用を助けることが報告されている (Chamot, 2005)。また、ストラテジー使用とL2能力の向上には肯定的な相互関係があると指摘している。さらに、言語学習ストラテジーに関する近年の研究では、L2学習の成功はストラテジーそのものより、与えられたタスクや状況に応じた学習者のストラテジー選択によると示されている (Vandergrift, 2007 他)。より熟達した聞き手はタスクによって幅広く様々なストラテジーをより柔軟に、頻繁に、高度に、適切に使用している (Smidt & Hegelheimer, 2004 他)。さらに、良い言語学習者はストラテジーを取り組んでいるタスクに適応させるのに長けている (Chamot, 2005)。明示的な指導によってリスニングストラテジーの使用と発達を促進することが、学習者のより効率よく、効果的で、自律的な聴解を助けるという考えは、近年のL2リスニング教育に関する研究 (Vandergrift, 2004 他) で実証されている。しかし一方、リスニングストラテジー指導に関して否定的な主張もある。学習者は教えられたストラテジーを意識的に活性化させる認知容量がないことや、明示的な指導で個々のリスニングストラテジーを別個で考えたり、ストラテジーが聞き手によって活用されているかを判断したりするのは難しい (Ridgway, 2000) ことをその論拠としている。個々のリスニングストラテジーを指導の対象にすることはストラテジー使用を促進するかもしれないが、必ずしもリスニングパフォーマンスを向上させるとは限らない。また、指導によって聞き手がストラテジーを組み合わせて適切に使用できるかは疑問である (Field, 1998; 2000) とする研究者もいる。リスニングストラテジー指導に関連した実証研究はほとんどなく、その効果を強く支持・否定する明確で一貫性のある研究結果は少ない。

そこで、私は本研究の研究課題を、「明示的なリスニングストラテジー指導で、生徒の聴解力が高まるのか」とした。

2 方法

2.1 参加者

公立中学校に通う、中学3年生を対象とする。統制群として33名 (男子17名、女子16名)、実験群として31名 (男子15名、女子16名) を設定した。いずれの生徒も、小学校5年生から英語学習を始めており、英語学習歴は4年の生徒であった。実験開始前にプレテストとして日本英語検定協会実施の英語検定3級リスニング問題を行った。その結果、実験群が $M=11.516$ であり、統制群が $M=11.515$ であり、等質な群であることが確認された。

2.2 測定具

プレテスト、ポストテストとして、日本英語検定協会実施の英語検定3級リスニング問題を使用した。さらに、実験

*長岡市立東北中学校

期間には、三省堂New Crown series3掲載のLet's Listenを4単元分実施した。それぞれの単元のトピックは、表1のようであった。

表1 4単元分のリスニングのタイトル、内容

単元	タイトル	内容
Let's Listen 1	動物園のアナウンス	・迷子のアナウンスを聞き、イラストの中から迷子の子を探す。 ・特別企画の案内を聞き、閉館時間やイベントの内容を把握する。
Let's Listen 2	英語落語『時そば』	・英語落語を聞き、話の順番にイラストを並び替える。 ・英語落語を聞き、落語のオチを説明する。
Let's Listen 3	テレビニュース	・ニュースを聞き、「いつ、だれが、どこで、何をした」を把握する。 ・ニュースの詳細についての質問に答える。
Let's Listen 4	旅行案内	・ツアーガイドの説明を聞き、旅行のスケジュール表を完成させる。 ・ツアーの魅力をまとめる。

2. 3 手順

まず、実験開始時に日本英語検定協会実施の英語検定3級のリスニング問題を両群の生徒に行った。問題は3部構成になっていて、問題の構成は次のようになっている。第1部はイラストを参考にしながら対話と応答を聞き、最も適切な応答を4肢の中から選ぶもの。第2部は、対話と質問を聞き、その答えとして最も適切なものを4肢の中から選ぶもの。第3部は、英文と質問を聞き、その答えとして最も適切なものを4肢の中から選ぶものであった。第1部、第2部、第3部、それぞれ10問ずつあり合計で30問であった。プレテストとして2018年度第2回の問題を、ポストテストとして2018年度第3回の問題を使用した。その後、5か月間にわたり実験群には明示的なリスニングストラテジー指導を行い、統制群には同一のトピックを伝統的な指導法で取り組ませた。1つの単元は2時間で取り組むように授業を構成した。ただし、実験群に対しては、1回目の実践の前に、リスニングストラテジーの定義とその具体例を示すために1時間を要した。そして、実験期間が終了後、再び両群の生徒に同じリスニング問題に取り組みせ、群間の聴解力の変容を検証した。まとめると図1のようになる。



図1. 本実験の実験デザイン

実験群へ指導したリスニングストラテジーは、Moradi (2013) が使用したリスニングストラテジーを使用した。具体的には計画ストラテジー、選択注意ストラテジー、自己評価ストラテジー、自己管理ストラテジー、類推ストラテジー、ノートストラテジー、要約ストラテジー、明確化ストラテジーの8つのストラテジーを指導した。

表2 リスニングストラテジー Moradi (2013) から抜粋

	方略名	詳細
1	計画ストラテジー (メタ認知ストラテジー)	実際にリスニング音源を聞く前に、問題を読み、自分にはどのような情報を聞かなければならないかを事前に考えておくというストラテジー。
2	選択注意ストラテジー (メタ認知ストラテジー)	リスニング音源の特定の側面にのみ注意を払って聞くというストラテジー。
3	自己評価ストラテジー (メタ認知ストラテジー)	リスニングを経て、自分がどの程度理解できているのかを客観的に把握するために、聞いた内容を紙に書き出すストラテジー。
4	自己管理ストラテジー (メタ認知ストラテジー)	リスニングをしている自分の状況を理解するというストラテジー。聞き取れた部分と聞き取れなかった部分とを自分で認知し、課題解決のために、調べたり尋ねたりするストラテジー。
5	類推ストラテジー (認知ストラテジー)	リスニング内容や、会話が行われているコンテキストから、未知語の内容を類推したり、コンテキストに関連した語句を想像して答えを求めるストラテジー。
6	ノートストラテジー (認知ストラテジー)	リスニングをしながら、キーワードや鍵となる概念をノートにメモをするというストラテジー。
7	要約ストラテジー (認知ストラテジー)	リスニングをしながら、パッセージの概要を作りながら聞くというストラテジー。
8	明確化ストラテジー (社会的・情意的ストラテジー)	リスニングの途中で、聞き取った内容について確認をしたり、言い換えたり、説明をしたりしながら、自分がどの部分が分かっているか、どの部分が分かっていないのかを明らかにするというストラテジー。

指導手順は実験群、統制群ともに次の3つのステップを踏んで指導が行われた。

- (1) プレリスニング活動
- (2) リスニング活動
- (3) ポストリスニング活動

プレリスニング活動では、これから聞くリスニングの内容についてのブレインストーミングなどを行い、背景知識の活性化を行った。どのような状況で行われているリスニングなのか、誰に向けて行われているリスニングなのかを教師とのやり取りや、生徒同士のやり取りを通して情報を膨らませた。

リスニング活動では、リスニング音源を聞きながら、リスニング問題に取り組んだ。リスニング問題では、リスニング音源の大意をつかむ問題が1つ、リスニング音源の細部をつかむ問題が2つの構成だった。

ポストリスニング活動では、リスニングしたものを再度自分で客観的に見直し、どのような情報を聞き取らなければならなかったのかを、教師とのやり取りや生徒同士のやり取りの中で明らかにしていった。その際に、実験群の生徒は、自分がどのリスニングストラテジーを使用したのか、その選択は妥当だったのか、さらに効果的にリスニングをするためにはどうすればよかったのかについて、自分で振り返る時間を設けた。

実験群には、プレリスニング活動とリスニング活動のときに、明示的に8つのリスニングストラテジーを指導した。そしてその後、リスニング問題に取り組ませた。それに対して、統制群には、これらの8つのリスニングストラテジーは明示的に指導せずに、上記の方法により指導したのちに、リスニング問題に取り組ませた。ポストテスト終了後に、実験群の生徒にはアンケートを行い、どのリスニングストラテジーを活用できたかを5段階のリッカード尺度で答えさせた。さらに、自由記述にて、今回の明示的なリスニングストラテジー指導に対する感想を記入させた。図2が生徒が実際に使

リスニングレバレッジアップ
組 番 氏名 _____

1. リスニング課題の把握
 どういう場面: _____
 誰が: _____
 誰に対して: _____
2. Pre listening
 どういう内容が話される: _____
 何に注目して聞く: _____
 予想されるキーワード: _____
3. While listening (必要ならばメモを取りながら聞いてもよい)
 予想した内容と合っていた部分: _____
 話の概要は: _____
 上手く聞き取れなかった部分: _____
4. Post listening
 パートナーのストラテジー使用は: _____
 自分のストラテジー使用は: _____
5. 振り返り

① 計画ストラテジー	{ 5 · 4 · 3 · 2 · 1 }
② 選択注意ストラテジー	{ 5 · 4 · 3 · 2 · 1 }
③ 自己評価ストラテジー	{ 5 · 4 · 3 · 2 · 1 }
④ 自己管理ストラテジー	{ 5 · 4 · 3 · 2 · 1 }
⑤ 類推ストラテジー	{ 5 · 4 · 3 · 2 · 1 }
⑥ ノートストラテジー	{ 5 · 4 · 3 · 2 · 1 }
⑦ 要約ストラテジー	{ 5 · 4 · 3 · 2 · 1 }
⑧ 明確化ストラテジー	{ 5 · 4 · 3 · 2 · 1 }

図2. 生徒が使用したハンドアウト

用したハンドアウトである。全4回の実践であったが、実験群においては、どの回も図2のハンドアウトを使用して指導を行った。

図2中の2～4 (Post listening, While listening, Post listening) については、個人の記入の後に、ペアでのシェアリングの時間を設けた。ペアは意図的なペア設定とはせず、学級での座席を基にしたペアとすることにした。それに伴って、ペアは基本的には男女のペアで構成された。

2. 4 データ分析

データ分析として、実験群、統制群のプレテストのデータ、ポストテストのデータを用いて分析を行った。データ分析にはjs-STAR (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/>) を用いて、「群 (実験群, 統制群)」「時期 (プレテスト, ポストテスト)」を変数とした、2要因参加者内での2元配置分散分析を行った。

3 結果

表3が参加者についての記述統計である。表3にあるように、プレテストでは、実験群が $M=11.516$ であり、統制群が $M=11.515$ であり、両群に違いがなかったことが分かる。しかし、ポストテストでは、実験群が $M=18.258$ と大きく得点を伸ばしたのに対して、統制群では $M=12.152$ とわずかな得点の伸びにとどまった。

表3 参加者についての記述統計

テスト	グループ	M	SD	最高点	最低点
プレテスト	実験群	11.516	4.514	19	3
	統制群	11.515	6.174	18	2
ポストテスト	実験群	18.258	4.428	27	4
	統制群	12.152	3.932	18	4

表4 2元配置分散分析の結果

ソース	タイプIII 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	partial η^2
指導法	298.124	1	298.124	16.1	**	.115
時期	435.089	1	435.089	23.5	**	.159
指導法 x 時期	297.933	1	297.933	16.1	**	.115
誤差	3331.308	124	18.550			

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

さらに、表4の2元配置分散分析の結果を見ると、指導法によって有意に得点の伸びが見られたことが分かった。

また、ポストテスト後の振り返りでは、「実際に放送を聞く前に、問題文を読み、どういう内容かを事前に想像しておくことで、余裕をもってリスニングに取り組むことができるようになりました」や「リスニング中の単語がいくつか分からなくても、前後の文脈から想像して解答するようでしたら、得点上がるようになりました」などの肯定的な記述が95%以上であった。一方、少数ではあるが、明示的なリスニングストラテジー指導への否定的な記述も見られた。

また、実験群のリスニング課題に取り組む様子では、実践を重ねると、特に、計画ストラテジーを多くの生徒が取り入れている様子が観察された。リスニング課題には必ず場面や状況が設定されており、それらの情報を手掛かりに、生徒たちは自身の生活経験や背景知識を基に、どのような内容が話されるかを事前に予想をしてリスニング課題に取り組む様子が確認された。この変化は実践の初期に観察された。その後、計画ストラテジーで立てた予想を基に、選択注意ストラテジーを多用する生徒が見られた。例えば、treatment4の旅行案内では、旅行のスケジュール表を完成させるために、時系列でリスニングがなされることを予想し、時を表す表現に着目した生徒がいた。しかし、このレベルまでストラテジーを駆使していた生徒は一部であり、大半の生徒は計画ストラテジーの使用にとどまっていた。

さらに、ノートストラテジーはほとんどの生徒が1回目の実践から使用することができていた。そして、実践を重ねるごとに、類推ストラテジーも半数近い生徒が使用している様子が振り返りの記述から見られた。一方、要約ストラテ

ジーはほとんどの生徒が使用することができなかったようだ。

4 考察

上記の結果から、明示的なリスニングストラテジーの指導は、統計的に生徒の聴解力を高めたことが分かった。しかし、実験群、統制群ともに、プレテストからポストテストにかけて、平均点の上昇が見られた。さらに、ポストテストの平均点とプレテストの平均点の差を見ると、統制群よりも実験群の方が大きかった。また、個々の生徒を詳細に分析すると、実験群では参加者の全員がプレテストからポストテストにかけて得点を伸ばしていた。これに対して、統制群ではプレテストからポストテストにかけて得点が伸びなかった生徒が2名いた。このことから、リスニングストラテジーを使用することによって、どの熟達度の生徒にとっても聴解力を高める一定の効果があったことが分かった。

さらに、ポストリスニング活動での生徒の振り返りを分析すると、8つのリスニングストラテジーの中でも、多くの生徒は計画ストラテジーと類推ストラテジーを多用している様子が確認された。それに対して、選択注意ストラテジーと要約ストラテジーはほとんど使われていなかった。これは中学生が英語学習の初期にあり、リスニングのボトムアップ処理に多くの認知資源を使用され、より高次のトップダウン処理にまで認知資源を振り向けることができなかったことが考えられる。それでも、プレリスニング活動として、スキーマの活性化を継続的に行うことで、生徒はリスニング音源を聞きながら、積極的に類推をし、よりトップダウン処理を行えるようになってきたと考えられる。

一方、統制群では、実験群ではないにしても、プレテストからポストテストにかけて平均点の上昇が見られた。これは、生徒の中に、明示的な指導を受けなくても、暗示的にリスニングストラテジーを習得したとも考えられる。しかし、このように暗示的にリスニングストラテジーを習得することができる生徒は一部にとどまり、また、広範なリスニングストラテジーの習得を暗示的に生徒に求めることは実質的に不可能である。また、リスニングストラテジーの気付きを得られない生徒にとっては、何度リスニングを行っても、どうすれば効果的に聞き取ることができるのかが分からず、得点の向上が見込まれない。このようなことを鑑みても、明示的なリスニングストラテジーの指導はどの熟達度の生徒にとっても一定の効果があったのだと考えられる。

実験終了後の生徒の振り返りを見ると、多くの生徒が明示的なリスニングストラテジーの指導に対して肯定的に考えている記述が見られた。特に熟達度の低い生徒は、「今までリスニングは何をやっても分からないと思っていましたが、ストラテジーを使うことで分かるようになりました」との記述にあるように、ストラテジーの使用によって、効果的なリスニングの方法を自覚して積極的に内容の把握に努めていた様子が見られた。しかし、数人の生徒は「自己評価ストラテジーを使おうとすると、英文がどんどん進んでいってしまっていて、途中でリスニングに間に合わなかった」との記述にあるように、生徒が持っている認知資源を超えたストラテジー（特に、メタ認知ストラテジー）を使用すると、リスニング中のボトムアップ処理が追いつかず、逆効果になりかねないことが分かった。このことから、生徒の熟達度を見極め、生徒に負荷のかかりすぎない量でリスニングストラテジーを指導する必要があると言える。さらに、生徒の英語学習歴や熟達度に応じて、認知ストラテジーから優先して指導をし、生徒がストラテジーに慣れてきたのを確認してからメタ認知ストラテジーの指導を行うべきである。

また、今回の実験では4つの異なるトピックのリスニング課題だったが、トピックによるリスニングストラテジー指導の効果の違いは見られなかった。このことから、明示的なリスニングストラテジー指導は、リスニングのトピックによらず、汎用的に効果があると言える。

5 結論

本研究では、明示的にリスニングストラテジーを指導することによって、生徒の聴解力が高まるのかを研究目的とした。その結果は、多くの先行研究を支持する「明示的にリスニングストラテジーを指導することによって、生徒の聴解力が有意に高まった」ことが示された。この研究結果から、リスニング指導をする際には、明示的にリスニングストラテジーを生徒に指導することが有効であるということが言える。さらに、生徒が自分がリスニングストラテジーを使用していることを意識することも、それ自体が1つのストラテジーであり、重要であることが示唆された。

教育的示唆として、生徒がリスニングを行う前に、準備となるリスニングストラテジー指導を明示的に行うべきである。さらに、リスニングの力を高めるために、特定のストラテジーを使用する指導と実践を行い、生徒がリスニングに困難が生じたときに対処できるように育成するべきである。またその際は、生徒の英語熟達度に配慮しながら、認知ス

トラテジーからメタ認知ストラテジーと順を追って指導することが効果的であると考えられる。さらに、明示的なリスニングストラテジーは、特定のトピックで効果を発揮するものではなく、どのようなトピックでも同じように効果があった。このことから、トピックに依らず、計画的にリスニングストラテジーの指導を行うことで、効果的に生徒のリスニング力を伸ばすことができる。

今後の研究課題として、量的なデータ分析・考察のみならず、質的なデータ分析・考察が必要である。さらに、実験結果の証明のためにはさらなる研究が必要である。他の言語や、より多くの参加者、より長い期間での実験が行われるべきである。また、今回の実験では、明示的なリスニングストラテジーの指導を行ったが、それがリーディングにも転移されたかどうか調査されるべきである。リーディングはリスニングと並んでインプットに分類される技能であり、リスニングストラテジーとリーディングストラテジーは大部分でリンクしている。そこで、今回のリスニングストラテジーで学んだことがどの程度リーディングでも生きているのかを調べることで、系統的なストラテジー指導の指針を得ることができる。

6 引用・参考文献

- ・ Chamot, A. (2005). LANGUAGE LEARNING STRATEGY INSTRUCTION: CURRENT ISSUES AND RESEARCH. *Annual Review of Applied Linguistics*, 25, 112-130. doi:10.1017/S0267190505000061
- ・ Field, J. (1998). Skills and strategies: towards a new methodology for listening. *ELT Journal*, 52 (2), 110-118
- ・ Field, J. (2000). 'Not waving but drowning': a reply to Tony Ridgway, *ELT Journal*, 54 (2), 186-195
- ・ Moradi, K. (2013). The impact of listening strategy instruction on academic lecture comprehension: A case of Iranian EFL learners. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 70, 406-416
- ・ Ridgway, T. (2000). Listening strategies - I beg your pardon?, *ELT Journal*, 54 (2), 179-185
- ・ Smidt, Esther & Hegelheimer, Volker. (2004). Effects of Online Academic Lectures on ESL Listening Comprehension, Incidental Vocabulary Acquisition, and Strategy Use. *Computer Assisted Language Learning-COMPUT ASSIST LANG LEARN*, 17, 517-556. doi: 10.1080/0958822042000319692
- ・ Vandergrift, L. (2004). Listening to learn or learning to listen. *Annual Review of Applied Linguistics*, 24, 3-25.
- ・ Vandergrift, L. (2007). Recent development in second and foreign language listening comprehension research. *Language Teaching*. 40, 191-210. doi:10.1017/S0261444807004338